

資料・研究ノート

マレーシア東海岸の天水田地域における稲作

——カンボン・ガロにおけるケース・スタディ——

坪 内 良 博*

Padi-cultivation in Rain-fed Field in Kelantan, Malaysia

——A Case Study in Kampong Galok——

by

Yoshihiro Tsubouchi

は じ め に

本稿は1970年から71年にかけて、西マレーシアのクランタン州において筆者が行なった実地調査の報告の第3報である。調査地の概況は前回の報告において述べているのでここでは省略する。本稿の目的は、ゴム園と共存する水稻耕作地帯における稲作の特徴を叙述することである。¹⁾

* 京都大学東南アジア研究センター

1) この調査は京都大学東南アジア研究センターとマラヤ大学経済経営学部によるマレーシア農村調査計画の一部として行なわれた。この調査計画はマレーシア稲作農村の比較を目的として社会科学系と自然科学系の研究者の協力によって行なわれた総合的なもので、ケダー州、クランタン州、マラッカ州の農村が選ばれた。いずれ総合的な調査報告がなされる予定である。

本稿の作成にあたっては、農林省熱帯農業研究センター技官永井臯太郎、杉本勝男、農林省農事試験場技官西尾敏彦、竜谷大学教授口羽益生、京都大学農学部教授富士岡義一、同助手堀内孝次、古川久雄、京都大学東南アジア研究センター教授石井米雄、久馬一剛、同助教授高谷好一、水野浩一、同助手前田成文氏などに貴重なアドバイスをいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

なお筆者によるクランタン調査地に関する既発表の報告としては次の二つがある。第1報：「クランタンの一農村におけるタバコ耕作の導入と社会・経済的变化」『東南アジア研究』9巻4号、1972. 3. 第2報：「東海岸マレー農民における土地と居住」『東南アジア研究』10巻1号、1972. 6.

ケダー州における稲作およびそれをめぐる自然条件に関しては、口羽・坪内「マラヤ北西部の稲作農村——農業労働について——」『東南アジア研究』5巻1号、1967. 6; 口羽益生「水稻作農村パダンラン——その自然条件と二期作化について——」『東南アジア研究』9巻4号、1972. 3 がすでに報告されている。

I 稲作のための条件

調査地 Galok はクランタン州を貫流するクランタン川 (Sungai Kelantan) の左岸の、ゆるやかな波状の起伏をもった中位もしくは高位の河岸段丘に位置している。この地域の水田は一見したところ一面平らにみえるが、しさいに観察すれば、水田一枚ごとに高低が認められる。水田一枚の大きさは0.15 エーカー (約6 アール) 程度である。

クランタン川は、そこからかんがいのために水を得るには、旧来の方法をもってしては余りにも崖が高く、またこの地域には支流もないので、水稻耕作は全く天水に依存して行なわれる。粘土質の土壌は水をよく保ち、高いしっかりしたあぜをつくって天水を保持して耕作が行なわれる。水かかりの悪いところでは陸稲が栽培されることがある。

比較的高い位置にある水田 (または畑) の土壌は、黒色のマンガン結核をもったにぶい灰色がかった黄色を呈しており、比較的低い位置にある水かかりのよい水田は、黄かっ色のはん紋をもった黄灰色を呈している。土壌の肥よく度は決して高いものとは言えないが、水の条件さえよければ無施肥で 300 gantang/acre²⁾ 程度の収穫が可能である。

各月別にみた雨量と、それに対応する稲作の農事暦は図1のごとくである。雨の降り方は、平均をとってみると規則性があることがはっきりと認められるが、年次別に眺めるとかなり不規則である。このことは天水田地域における稲作を非常に不安定なものにしている。

しばしば水不足になやまされる河岸段丘上の天水田の発達にとって、マレー人の small holders の手によるゴム園の開発はきわめて大きな役割を演じたと思われる。実際、この地域ではゴム園と水田とはわずかの土地の高低に応じて混在し、人々の多くは、稲作とゴム園経営を同時に行なっている。

この地域の開墾は、かつて重要な交通路であったクランタン川に沿って始まり、川沿いの部分が約100年前、調査地 Galok 付近が約80年前、より奥の新しい水田が約55年前にひらかれたといわれる。ゴム園が急激に広がったのが今世紀に入ってからであるとする、最初に集落ができ始めた頃はまだゴムの影響をうけていなかったかも知れない。しかし、現存する最年長の者でも既にゴムとは不可分の生活を経験して来たことになる。人々はゴム園から現金収入を得る半面、主として自家用の米を得るために、上述の不安定かつ不利な稲作を続けて来たのである。

Galok には1968年からタバコ栽培が水稻の裏作として導入されたために、とくに若い年齢層を中心として、ゴムにも水田にも依存せず、乾期中の水田を借りて、もっぱらタバコに頼って生活する者が増加して来た。³⁾ このため、稲をつくっている農家の割合は相対的に低下した。

2) 1 gantang=1 英ガロン、1 300 gantang/acre=玄米 133 kg/10アール=玄米 0.89 石/反。

3) タバコ耕作の影響については、「クランタンの一農村におけるタバコ耕作の導入と社会・経済的变化」『東南アジア研究』9巻4号、1972.3を参照されたい。

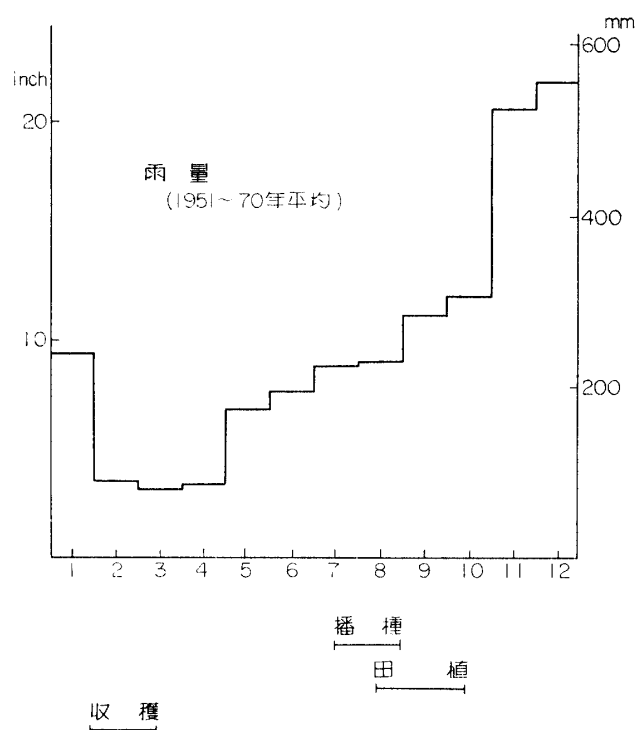


図 1 雨 量 と 農 作 業

全世帯数146のうち半数弱にあたる71世帯が稲作に従事している。本稿ではこれらの世帯がいかに稲作を行なっているかを叙述する。

II 耕作規模および収量

Galok に居住して稲作を行なっている71世帯が耕作できる水田面積は約100エーカー (40.5 ha) であって、一世帯平均1.4エーカー (0.57 ha) である。このうち約23%にあたる23エーカーが他人から借りた耕作地で、他は自作地である。小作をしている者は19世帯を数えるが、このうち自小作が13世帯で、小作のみを行なっているのは6世帯に過ぎない。自小作は小作の延長としてよりもむしろ自作の延長としての性格の方が強いので基本的に小規模な自作農を主体としているといえる。

上に示した100エーカーは、毎年完全に耕作される訳ではなく、田植期における雨の量によって毎年いくらか作付不能の田が残される。とくにここ数年はかんばつ気味の気候が続いている。1970/71年度における各農家の水田面積と作付面積は図2のごとくとなる。作付面積は約81エーカー (81%) であった。前年度 (1969/70) にはもっとひどい水不足があつて、約64エーカー (64%) が作付されたに過ぎない。

水不足の年には単位作付面積に対する収量もまた低くなる。各農家の収穫量をききとり調査

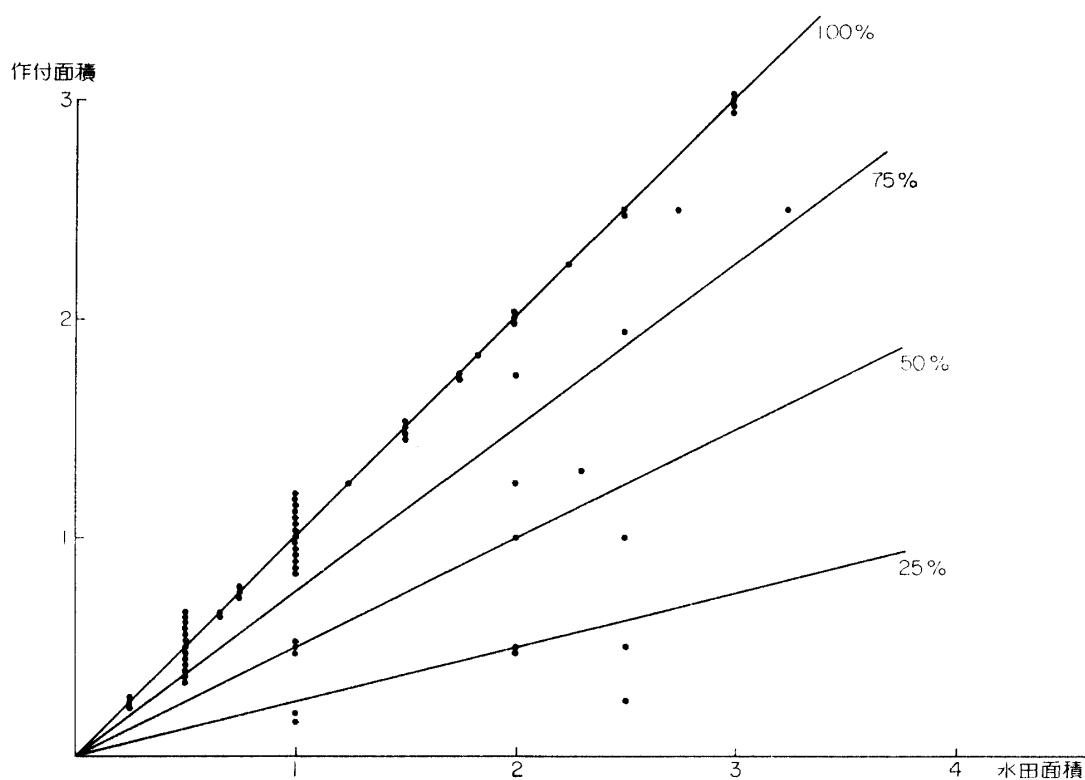


図 2 水田面積と作付面積(1970/71年度)

によって調べ、これから作付面積(エーカー)あたりのもみ収量を算出すると、通常の収穫の場合 309 gantang/acre が期待されているが、1970/71 年度の収穫は平均 220 gantang/acre、1969/70年度はわずか 124 gantang/acre であった。

小規模な経営規模のため、生産される米はしばしば自家消費用にさえも十分ではない。309 gantang/acre の収穫が 100% 作付けられた耕地から得られたとしても、一農家あたり 430 gantang 余(白米換算約 710 kg)の収穫が得られるに過ぎず、平均 5.6 人から構成される家族を養うのがせい一杯である。実際には作付面積の変動と収穫量の変動のためこれだけの収量は到底実現されない。かくして、毎年米を全く購入せずに生活できる稲作農家は、32 世帯(42%)に過ぎない。収量の不安定さは、豊作で余剰米が生じてもそれを売らず、翌年のためにたくわえるという傾向を生ぜしめている。このように、Galok における米の生産はほとんど完全に自家消費用であって、生活物資の購入に必要な現金は、ゴムタッピング、タバコ栽培あるいは他の仕事を通して得られる。

Ⅲ 土地の高低と作付品種

既に述べたように、この地域ではゆるやかな土地の起伏が存在するために、天水がたまり易

い場所と、めったにたまらない場所とが存在する。耕作にとって条件がよいと考えられるのは古い川の跡とみられ、現在も雨の後で水の流れ路になり易い tanah alor とよばれる土地である。tanah alor を含んで水の深い土地を村人は tanah dalam (水の深い土地) とよぶ。これに対して水かかりの悪い土地は tanah darat (かわいた土地) とよばれる。

tanah dalam に適した水稲の品種として、Piah, Pak Amat, Segupal, Padi Merak Siam などが挙げられる。tanah darat に植えられる水稲としては、Intan Belian, Anak Ikan, Ali Loghat などが数えられる。また、水がたまらない場所で栽培する陸稲 (padi tugalan) として、Pok Dut, Bidor などがある。

それぞれの品種がどの程度採用されるかを表1に示す。最も一般的に採用されている品種は、tanah dalam では Piah, tanah darat では Intan Belian である。Piah を用いている農家は52, Intan Belian を用いている農家は27ある。両品種を合わせると、植付けされている水田筆数の75%以上になる。

1品種のみを作付している農家は41世帯であって、残りの30世帯は2品種以上を組み合わせで使用している。組み合わせのうち最も多いのは、Piah+Intan Belian である。わずかの高低差のために、隣合っている田でも別の品種を植えることがある。

表 1 使用されている品種と植えつけられた plot 数 (1970/71)

品 種 名	特 徴	plot の数
Piah (Pia)	tanah dalam むき	274
Intan Belian	tanah darat むき	108
Pok Dut	dry padi	33
Pak Amat	tanah dalam むき	24
Segupal	tanah dalam むき	18
Anak Ikan	tanah darat むき	6
Ali Loghat	tanah darat むき	6
Merak Siam	tanah dalam むき	5
Padi Kedah		5
Mahsuri	新 品 種	3
Lembu Basah+Piah (混合)		3
Nalong		2
Ria	新 品 種	2
Maya Batil		2
Pulut	も ち 米	1
Bidor	dry padi	1
不 明		12
計		505

前年度に対して品種を変更したものは5世帯ある。それらは下記の通りである。

ケース I Pak Amat+Intan Belian→Piah

ケース II Segupal+Anak Kerenga→Piah+Intan Belian

ケース III Intan Belian→Intan Belian+Piah

ケース IV Padi Kedah→Piah

ケース V Intan Belian→Piah

1970/71年度は前年度よりも水の量がやや多かったことがこのような変化にある程度関係している。(ケース III, V)。前年度の収穫が思わしくなかったので変えた者もある。(ケース I, IV)。

Mahsuri, Bahagia などの新品種は、二期作化された地域では一般に用いられるが、ここでは全く使用されない。1ケースのみ Mahsuri を用いているケースがあるが、これはクランタノ川対岸の二期作地に相続した土地を持っているためである。

IV 主な農機具とその所有状況

自家消費を目的とする小規模な稲作には、複雑・高価・高能率の農機具は用いられず、できるだけ簡単な装備で耕作が行なわれる。主な機具は、畜耕用のすき一式(igu, nangar, nayer, penolok), くわ(chok, 標準語では changkul), 稲刈り鎌(sadat, 標準語では sabit), 脱穀用のおけ(tong)などである。マラヤの穀倉といわれる Kedah 州においてみられるような, tajak (大鎌), penggiling (均平機), kuku kambing (「山羊の爪」という意味の移植道具), kipas angin (風選用送風機)などは全く用いられない。

農耕用の機具は、Kedah のそれにくらべると構造がやや簡単である。例えば Kedah では鋼鉄製のすきが用いられるのに対して、ここでは木製で、せいぜい先端部を空缶のブリキなどで補強した程度である。代かき作業に用いる gerap (Kedah では sisir) も、木材に簡単な歯をうえこんだだけで、とっての部分などが Kedah におけるほど念入りにはつくられていない。

主な農具の所有状況は表2に示す通りである。以下、それぞれの入手方法や価格について述べよう。

(1) すき

木製のすきは、農夫が自分でけずってつくるか、あるいは近くの村大工や器用な者にその製作を頼む。38名の所有者のうち21名(55%)が自分でつくっている。人に頼む場合、Galok に居住する者に依頼するケースが大部分を占めるが、隣りの集落である Atas Beting や Paya Mengkuang の者に頼む場合も若干ある。Galok の中では Salleh bin Samat という名の大工

表 2 主な農具の所有状況

農 具	所有数別世帯数						所有世帯の割合	一世帯あたり平均所有数
	0	1	2	3	4+	計		
す き	33	38				71	53.5%	0.54
く わ	5	27	25	10	4	71	93.0	1.75
鎌	10	31	20	7	3	71	85.9	1.48
脱穀用のおけ	29	42				71	59.2	0.59

がとくに多くの注文をうけている。M\$10⁴⁾ 前後の支払いが行なわれる。耐用年数は 5, 6 年と考えられるが、ときには部分的な修理を加えながら 10 年以上使用している者もある。

すきに付随して gerap がある。これも大部分は自分でつくるが人に頼む場合もある。後者の場合には M\$ 1.50~3.50 が支払われる。

(2) くわ (chok)

各農家が所有するくわの購入先を調べると表 3 のようになる。半数が Pasir Mas の町で購入され、他の多くが Galok 付近で購入されている。標準的な価格は M\$ 3.50~4.00 である。耐用年数は 4, 5 年と考えられる。

(3) 稲刈り鎌

鋸状の刃をもつ鎌が稲刈用のものであるが、草刈り鎌もまた稲刈りに用いられる。これらの鎌の入手先も表 3 に示す通りである。くわの場合に比べて、Pasir Mas あるいは近辺の集落で購入される割合が低く、これに代わって、行商人や州内のやや離れた場所、あるいは Kedah 州

表 3 くわとかまの購入先

購 入 先	く わ		か ま	
	個 数	(%)	個 数	(%)
集 落 内 の 店	9	(7.3)	0	
隣接集落の店	33	(26.5)	10	(9.5)
行 商 人	0		20	(19.0)
Pasir Mas	62	(50.0)	32	(30.4)
Tanah Merah	11	(8.9)	5	(4.8)
そ の 他 州 内	0		24	(22.9)
Kedah 州	0		7	(6.7)
不 明	9	(7.3)	7	(6.7)
計	124	(100.0)	105	(100.0)

4) M\$ 3 ≡ US \$ 1 (調査時)

での購入が目立つ。後二者はこの村から Kedah や州内の二期作地へ収穫期の出稼ぎに行く者があることと密接に関係している。鎌の標準的な価格は、M\$ 2.00～2.50 である。耐用年数は 4, 5 年である。

鎌の代りに、あるいは鎌と同時に、穂づみナイフ (tamil, 標準語では pengetam または tuai) をもつ者が 8 世帯あり、合計 14 個が所有されている。多くは鉄の刃だけを Pasir Mas の町で買ってあり、竹と木を細工して自分で持手をつける。鉄の刃の価格は 1 個につき 20¢ 程度である。

(4) 脱穀用のおけ (tong)

脱穀に用いるおけは、すきの場合と同様自分でつくる場合がかなり多い (42 例中 18 例)。製作に要する材料の板は約 M\$ 4 である。村内あるいは隣接集落の者に製作を頼む場合には、材料費を含めて M\$ 10 前後を支払うのが普通である。tong を所有せず、収穫時に他人のものを借用して済ませる者もかなり多い (71 世帯中 29 世帯)。耐用年数は 5, 6 年と考えられる。

V 稲作上の慣行および稲作労働

この地域における稲作労働の特徴は、一言でいえば、共同労働組織を欠く状態で、家族労働を主体として行なわれることである。各農家における労働に参加できる者の人数を表示すると表 4 のようになる。核家族が多いために世帯主夫妻が主な労働力となっている。子がある程度成長している場合には、田植えや刈取りの場合などにその助けを期待することができる。主要労働力である夫や妻に、病気や妊娠など労働できぬ事情が生ずると、労働雇用に頼らざるを得ないことになる。世帯主の老齢化や、離婚・死別による配偶者の欠如も労働雇用を要請する。

稲作労働における性的な分業は必ずしも厳密ではない。このことは作業が家族単位で行なわれるため、仕事の分担に関してゆうずうが付き易く、またつけざるを得ない場合があることに関連している。⁵⁾ ゴムタッピングが主として女によって行なわれるので、男が稲作において本来女の領分とされる仕事（たとえば田植え）までも行なうという側面もある。

以下、稲作慣行に関する若干の説明を加えながら、主な稲作労働について述べることにしよう。とくにことわらない限り、1970/71 年度における稲作に関するものである。

(1) 苗代

7 月に入って雨の量が次第に増して来ると苗床づくりの作業をはじめめる。この地域でもマラヤの他の地域と同じく、Bintan Tujoh (Pleiades) の位置によって農事上の季節が判断される

5) 例えばケダー州でみられるように、女性の田植えグループが存在する場合、男がそれに加わることはほとんど不可能となる。cf. 口羽・坪内「マラヤ北西部の稲作農村——農業労働について——」『東南アジア研究』5 巻 1 号, 1967. 6.

表 4 家族内における労働力

	女						計
		0	1	2	3	4	
男	0			1			1
	1	1	35	11	3		50
	2		6	7	2		15
	3		3	1			4
	4		1				1
	計	1	45	20	5	0	71

が、実際の耕作は雨の降り方によって決定されている。よく水がたまる箇所を選んで水苗代がつくられるが、水が十分来ないところには畑苗代がつくられることもある。

整地が終わると播種 (menabor) を行なう。播種に際して種もみの消毒などは行なわない。播種量は本田1エーカーあたり、平均 10.9gantang (12.3 l/10 アール) である。これは鳥や水牛が



写真1 苗床をつくる (均平作業)

食べたりすることと発芽不良を予想して多めに播いているためである。⁶⁾ 実際に移植するのは 7.7 gantang (8.7 l/10 アール) に相当する量である。農務局の官吏も農民の使用量は本田1エーカーあたり 8 gantang (9 l/10 アール) と推定しており⁷⁾、ききとりの結果とはほぼ一致する。

苗床を準備し播種するのは、主として男子世帯主の単独の作業であるが、男4に対して1くらいの割合で女が単独で行なうこともある。大部分は自分の土地に自分の苗代をつくるが、まれには隣人や親戚の者に種もみを渡して頼んだり (tumpang)、すでにできあがった苗を買ったりすることもある。

(2) 本田整地

田のあぜの修理および荒おこしは、世帯主である男の仕事である。荒おこしには水牛(kerbau)または牛(lembru)を用いるが、近年大型のトラクターによる賃耕を利用するものが現われて来た。具体的な様相は表5に示す通りで、畜耕によるものが47世帯(66%)、トラクター賃耕に依

6) 苗代のまわりに嚴重にさくをつくって水牛やあひるなどの侵入を防ぐことは、たまに行なわれることもあるが一般的ではない。

7) 農務局では本田1エーカーあたり 3 gantang (3.4 l/10 アール) で十分とみている。なお、ケダー州 Padang Lalang では 2 gantang/relong (3.2 l/10 アール) と報告されている。(cf. 日羽・坪内, *op. cit.* p. 13)

表 5 本 田 耕 起 整 地

労 働 力	方 法		
自力 (sendiri)	牛	自己所有	21
		自己所有+pawah	2
		自己所有+sewa	2 27
		pawah	1
		sewa	1 40
	水牛	自己所有	10
		無料借用	1 13
		pawah	1
		sewa	1
	無料で手助け	牛	2 71
雇用 (upah)	牛		3
	水牛		2 27
	トラクター		22
陸稲耕作のため牛、水牛、トラクターを用いず			2



写真2 牛を使った荒おこし



写真3 水牛を使った荒おこし

存するものが22世帯 (31%) である。畜耕によるもののうち、作業を自分で行なうのは40世帯であって、残りの7世帯は他人を雇っている。

畜耕の場合、水牛は力が強いので大抵一頭だけですきをひかせる。牛を用いる場合には二頭だてのことが多い。牛による荒おこしと水牛によるそれとの比は、だいたい2対1くらいで、牛を用いることのほうが多い。

田に水を入れない状態で犁耕を1回行ない (gala beloh), 次いで田に水が入ってからもう1度行なう (gala balek, または gala lumat)。さらに代かき (gerap) を2度行なう。畜耕の場合の作業時間は、朝7時頃から10時頃までで、田の大小に応じて1日につき田1~2枚くらいの割合で作業を進めていく。耕作面積のいかんによって、播種に前後して作業が始められる。

水牛や牛を所有しない場合には人から借りた家畜を使って耕作をすることがある。牛の場合には1頭を所有し、他の1頭を借りることもある。貸借の形態は二種類ある。第1は pawah とよばれ、生まれた仔を分配するという条件の下に、借りた者が長期にわたって世話をし、その間の使用権をももつという形態である。第2の形態は sewa とよばれ、通常1シーズンの間、有償で借用する。支払いは収穫後もみ米でなされることが多く、牛1頭で 40~50 gantang, 水牛1頭で 80 gantang 程度である。⁸⁾ これだけの額を支払ってしかも自力で耕作するのは、ある程度以上広い土地を耕すことを前提としている。

自ら作業をせずに人と牛(または水牛)を雇って (upah), 荒おこしをしてもらう場合もある。upah のケースは5例あったが、うち4例が親族関係にあるもので、1例のみ他人を雇用していた。耕作面積は平均0.6エーカーで支払い額は1件について M\$ 10~20 である。1エーカーあたり約 M\$ 21, 1日あたり M\$ 2 くらいの計算になる。

無料で作業をしてもらった場合が2例ある。いずれも非常に近い親族(夫の父、妻の弟)である。

トラクター賃耕を頼んだ22世帯が実際に賃耕させた面積の平均は1.2エーカーで、人を雇った場合よりも大きい。22例のうち10例は自分で水牛や牛を所有しない者である。3例は牛を持っているがまだ若すぎるものである。他の3例は牛を1頭だけしか所有していない。1例は牛を2頭もつが弟がトラクターの運転手をしているため無料でやってくれたもの、また他の1例は水田が川むこうにある。かくして4例だけが利用できる水牛または2頭以上の牛をもっているにもかかわらず何らかの事情のためにトラクター賃耕に依存している。

Galok にはトラクターを所有する者はなく、隣の集落 (Chekok) あるいは他の集落に所有者がいて運転手を雇い賃耕をやらせている。1エーカーあたり M\$ 30~35 で賃耕を行なうといわれるが、実際に支払った金額から計算すると、平均して M\$ 17/エーカーに過ぎない。実際のとりきめは田1枚あたり M\$ 3 とか、1時間あたり M\$ 8 という形でなされる。弟が運転手であったため無料という一つのケースを除けば、支払い額は最低 M\$ 8 から最高 M\$ 40 までで、70%が M\$ 8~20 の間である。

(3) 田植え

播種後約40日で移植を行なう。苗代から苗をひきぬいて束にする作業 (chabut semai, また

8) 40~50 gantang は M\$ 17~22, 80 gantang は M\$ 35 程度に相当するが、Galokの農民の間では、1 gantang を M\$.50 として計算することが多い。

いところから牛2頭を 50 gantang で借りたケースや、牛1頭を 40 gantang の約束で借りたが、収穫が悪かったので 15 gantang にしてもらったというケースなどがあり、支払い額に関しては若干ゆうずうがきくようである。なお、ケダー州の Padang Lalang では水牛1頭に対して、現金で M\$ 60~120, もみ米で 1~1.2 kuncha (160~192 gantang) が支払われている。(cf. 口羽・坪内 *op. cit.* p. 12)

表 6 苗 束 づ く り

	作 業 者	ケース数
自 力	妻	31
	妻+娘	9
	妻+娘+夫	3
	妻+娘+母	1
	妻+夫	7
	妻+母	2
	妻+姉妹	2
	妻+その他の親族	1
	母	2
	妻+雇用	2
	妻+娘+雇用	1
雇用		4
苗束購入		1
陸稲直播		5
計		71

は menyambut) は原則的には女の仕事である。具体的な様相は表 6 に示される。一家の主婦を主要労働力とし、これに娘や夫が手助けをすることがある。数は少ないが手助けの者を雇ったり(3 ケース)、あるいは完全に雇用のみに依存すること(4 ケース)もある。また例外として苗を購入した例が一つある。

苗束づくりの場合、作業時間は、午前中(pagi)は7時から12時、午後(petang)は2時(または3時)から5時である。午前中働くと、両手でにぎれる位の大きさの束を約20束(20 uting)つくることができる。田1枚あたり30〜40束位の割合で準備する。人を雇う場合には1束5¢を支払う。苗束を購入した場合には1束8¢を支払っている。

準備された苗束は田のあぜに運ばれ、適当な箇所で葉先を切られる。農民は葉先を切るのは、強風によって苗が倒れるのを防ぐためであると考えている。苗束を水田の要所要所に配置しておいて、自分自身で苗を補給しながら手で植えていく。5〜7本の苗が一箇所に植えられる。株と株との間隔は約30 cmに植えられ、できるだけ一列にそろうように心がけるが、実際にはかなりの乱雑植えとなる。

田植え(chedong)は、原則的には女の仕事とされるが、実際には男も重要な労働力となっている。具体的な労働参加者は表7の如くである。夫と妻という組合せが基本的な形態となっており、これに娘や息子が加わることがある。共同労働組織は全く欠如していて、人手が足りな

表 7 田 植 え

	作 業 者	ケース数
自 力	夫+妻	23
	夫+妻+息子	3
	夫+妻+息子+娘	3
	夫+妻+娘	1
	夫+妻+母	1
	夫+妻+きょうだい	2
	夫	12
	夫+息子	1
	夫+娘	1
	夫+母	1
	妻	6
	妻+娘	3
	妻+息子	1
	自力+雇用	2
	雇用	6
	陸稲直播	5
	計	71

い場合には人を雇う。家族の労働力に加えて人を雇った場合が2例、雇用のみに依存した場合が6例ある。

田植えの作業時間は、苗束づくりの場合とほぼ等しい。午前中に20束、午後7～10束を植えるのが標準的な作業量である。実際には2人で働いて1日1～2枚ずつの植付けを行ったりする。1人で田植えをする場合には、田1枚あたり、1～2日かかるものとみている。人を雇う場合には1束5¢が通例である。

中耕・除草・追肥などはいずれも行なわないのが普通である。

(4) 収穫

稲刈り (cherut, mencherut) は、2月から3月初旬にかけて行なわれる。すなわち播種してから150～200日後である。現在では鎌を用い行なうが、10年前にはかなりの者が穂づみナイフ (tamil) を用いていたという。今日では穂づみを行なう者はごく一部に過ぎない。

地上30cm位の高さで刈り取った稲は、小さな束にして切株の上においていく。それをいくつか集めて両手でささげることができる程度の大きな束をつくり、おけの中のはしご状の横木に打ちつけて脱穀 (memukul) を行なう。もみ米はその場で天日で乾燥され、午後、竹製の浅いざる状の容器に入れて、肩の高さから地面にしいたごぎ (tikar) の上におとして自然の風



写真4 刈取り



写真5 脱こく

で風選される。もみ米はジュート袋に入れて、肩にかついだり自転車にのせたりして家へ運び、穀倉 (baloh) がある場合にはその中に、ない場合には大きな竹籠などに入れて保存する。

稲刈りと脱穀の作業を行なった者の詳細は表8に示す通りである。夫婦が中心となって一家総出で作業を行なうのが基本的な作業形態で、労働力が足りないときや、家族内の労働力に支障があるときには、人を雇う (upah) か、親しい者に手助け (tulong あるいは pinjam) してもらう。共同労働の組織は全くない。

女が稲刈りをして、男が脱穀をするのが通常の方業の形であるが、男もまた稲刈りをするともある。

作業を行なう時間は、苗束づくりや田植えの場合にほぼ等しい。夫婦だけで働いた場合、午前中に収穫できる量は 20～50 gantang である。最も能率よく働いた場合に可能な収穫量は2人で1日 100 gantang であるという。

人を雇う場合、Pasir Mas の対岸の二期作地 Salor へ出稼ぎに行った場合には1日5 gantang が標準的な報酬であるが、ここでは与えられるもみ米の量には必ずしも一定のきまりはない。例えば夫の妹夫婦が娘をつれて3人でやって来て15日間働いたのに対して 40 gantang を与えたというような例がある。⁹⁾ 1日単位ではなく、全作業日数に対して、5～15 gantang 程度のもみ米を与えるのが一般的である。¹⁰⁾

9) ただしこの場合には、宿舎を提供し食事を与えている。

10) 現金で雇用する場合の支払い額は、刈取り、脱穀、運搬のすべてを行なって、100 gantang あたり M\$ 12 であるというが、Galok では現金を支払ったケースは皆無である。

表 8 収 穫

	作 業 者	ケース数
自 力	夫+妻	27
	夫+妻+子	15
	夫+妻+子+孫	1
	夫+妻+きょうだい	3
	夫+妻+母	1
	夫+妻+父+母	1
	夫+妻+その他の親族	1
	夫	1
	夫+子	1
	妻+子	4
	妻+父+母	1
	妻+父	1
	妻	1
	夫+妻+子+雇用	3
	夫+妻+雇用	4
	夫+雇用	2
	妻+雇用	2
自力+雇用	妻+母+雇用	1
	雇用	1
計		71

作業に雇われるのは、親戚・隣人が多く、父母やきょうだいという場合もある。父母やきょうだいの場合には、若干の謝礼をすとしても、雇うというよりは手助けの要素が強い。他人を雇う場合でも、手伝ってくれた者にザカート (zakat) としてもみ米を与えたという例も存在し¹¹⁾、この場合にも雇用の観念は十分ではない。

無料で手伝うケースはきわめて少ないが、父母、きょうだい、子に限られ、彼らの間には日常的にも密な相互扶助が認められる。

風選 (menapi) は基本的には女の仕事であり、ほとんどの場合主婦がこれを行なう。運搬は夫が中心となって単独で行なう



写真6 うすときねを使う精米

11) zakat はイスラムの宗教税である。本来は 300 gantang 以上の収穫がある場合、その10%を徴収人であるイマムを通して政府におさめるべきであるが、この地域では零細農が多いので、その徴収は必ずしも厳格ではない。

か、あるいは妻や子の助けを借りる。

もみすりと精米は自分の家の庭先で、木製の臼ときねを用いて行なうこともあるが、多くは隣集落にある三つの比較的小さな規模の精米所のいずれかで比較的少量ずつ行なう。料金はもみ米 1 kati (約 600 g) あたり 5¢ 程度である。

VI 陸稲 (padi tugal) の耕作

Galok の稲作において陸稲と水稲とはかなり連続的な性格を示している。すなわち、ほんの少しでも土地が高くて十分に水が来ない場合にしばしば陸稲が栽培されるのであって、陸稲と水稲とがとなりあって植えられることもある。

水稲と比較した場合、耕作方法における基本的な相違は、播種が直接に行なわれることである。先のとがった棒で地面に穴をあけ、種もみを数粒から10粒程度ずつまいていく (tugal)。陸稲の場合水稲に比して雑草の生育が著しいので除草を行なう必要がある。

Galok の住民のうち陸稲を耕作しているのは9名で、前述の100エーカー中7.4エーカーが陸稲耕作に用いられている。陸稲のみを耕作しているのは5名で、他の4名は水稲をも耕作する。

陸稲の収量は、雑草の繁茂や鳥害・病虫害のために、水稲にくらべて低い。水稲にくらべてはやく成熟することもあるが、この場合、集中的な鳥害や虫害をうけることもある。1970/71年度における平均収量は、118 gantang/acre であった。

VII 新しい技術の導入とその限界

自給的な性格が強く、作柄も不安定なこの地域の稲作は、大きな改良を加えられることもなく存続しやすい傾向をもっている。とはいえ詳細に観察するとそこにも若干の変化が生じていることが明らかとなる。以下、変化しつつある側面と、従来の方法に固執する側面とのからみ合いに注意しながらいくつかの事実について述べよう。

(1) 品種の選択および種もみ使用量

農民は品種の選択に関して決して鈍感ではない。従来の経験から土地の高低に応じて適当な在来種が選ばれている。以前はもっと多く用いられていたが、今は少なくなった品種もある。たとえば Lembu Basah とよばれる品種がその一つであるが、penyakit merah (赤枯病) に弱いために作付が減ったのである。農民の一部は交換などを通してたえず新しい品種を試みよう

としている。出稼地のケダー州から持ち帰った米も Padi Kedah¹²⁾ の名の下に試みられている。しかしながら、種もみは原則として自分の収穫の中から保存されるのであって、このことのために急激な品種の変化はおこりにくいという事情も存在する。

種もみの使用量が農務局の指導する量をはるかに上回ることはそれなりの理由がいくらかある。第1に苗代の水の条件が必ずしも良好ではないので発芽してうまく生育する苗の割合が一定であるとは限らないし、また苗代はしばしば水牛などにいためつけられる。第2に、耕作を予定した本田に水が来なかった為に、無駄な苗を準備したことになる場合も生ずる。第3に、耕作面積が比較的小さいため、種もみの絶対量が少ないので、それぞれの農家で少し多めに準備すると、割合としては非常に大きくなるという側面もある。第4に、移植に際して一株あたりの栽植本数が多いことも、種もみ使用量の多いことと関連している。自家用の米を確保するという意味から、安全性に重点をおいて稲作が行なわれるのであるが、種もみ使用量の多さはこの安全性と強く結びついているのである。

(2) トラクターの導入

既に示したように現在3分の1弱の農家がトラクター賃耕に依存している。この意味でトラクターはこの村にも既にかなり導入されたといえる。水稻裏作としてのタバコ耕作の導入は、現金収入の増加をもたらした¹³⁾、現金による支払いを容易にして、賃耕の受入れに大きく寄与したと考えられる。しかし、トラクターを使用した者は主として水牛や牛を所有せぬ者であるというところに問題がある。水牛や牛はこれらを飼育すること自体によっても、生まれた仔の売却や成長にともなう価格の上昇を通じて利益を生み出すのである。このような家畜飼育と耕作における畜耕とが密接に結びついているために、トラクター賃耕が全面的に採用されることは現在のところ考えられない。

既に述べたように、この地域の天水田においては、耕作可能な面積が年によって変動するので、水の到来を予想して耕起を行なっても、結局は田植えができぬ場合も生じ得る。また雨量如何によって作況がきわめて悪い場合もある。このような不安定な条件の下においては、他の仕事への就業機会の少なさを背景として、自らの労力の浪費は惜しまないが、現金支出は惜しむ者も存在し、このこともトラクターの全面的普及をうけ入れない一つの要因となっている。

(3) 化学肥料

タバコ耕作による現金収入は化学肥料の使用を容易にしている。これに加えて、政府は化学

12) 「ケダーの米」の意で、ケダーでは別の名が与えられているはずである。

13) 1970/71年度においては、稲作農家71世帯中68世帯がタバコを耕作し、平均 M\$ 432 を得ている。

肥料の購入に対して補助を与えており、土地保有証書 (Land Grant) と身分証明書 (I.D. Card) とを penggawa¹⁴⁾ の事務所に持参すれば、通常価格 1 袋 (80 lb) M\$ 9.50 を M\$ 6.72 で購入することができる。政府を通して得られるのは I.C.I. の Baja Padi Kelantan, No. 1 Sebastian とよばれる配合肥料で、その構成は 12:12:5 である。

Galok における化学肥料使用者は、21 名 (全農家の約 30%) であるが、このうち 2 名は川むこう (seberang) の水田で肥料を使用している。これら 2 名を除いた 19 名についてみると、1 袋を用いた者 7 名、2 袋 7 名、3 袋 1 名、4 袋 4 名である。平均すると 1 エーカーあたり 1.6 袋¹⁵⁾ が使用されている。

化学肥料使用者の地域的分布に関しては興味深い状況がみられる。すなわち penggawa の事務所に近い部分、すなわち集落の南半分に居住する者が使用者の 7 割以上 (19 名中 14 名) を占めていることである。彼らには肥料購入に関する penggawa からの通達が届きやすいのである。逆に Galok の北半分に居住する者の中には、肥料を購入できる日時を知らなかったため購入できなかったという者がある。

北半分に居住する者の一部には、自分の田の水深が大で、かつ既によく肥えているから肥料を用いる必要がないという者もあって、penggawa 事務所からの距離のほかに、水田の立地条件が肥料使用を制限している場合も若干ある。

土地の条件が比較的似ている Galok の南半分の農家だけをとり出して、化学肥料を用いた者と用いなかった者の収量を調べてみると、1970/71 年度においては、化学肥料を用いた者は平均 226 gantang/acre の収量を得たのに対し、用いない者の収穫は 165 gantang/acre であった。

肥料を用いなかった者の水田の中には、水かかりの不安定な水田がより多く含まれている可能性もあるから、この差は条件を完全にコントロールした結果とは言えないが、肥料の効果に対する村人の信頼には確固たるものがある。現金がなかったから肥料が買えなかったという者がなおかなり存在するところから判断すると、タバコ耕作の安定化とそれによる現金収入の増加は、今後さらに使用者や使用量を増加させることが予想される。ただ、深水の水田を有する者や、水かかりの不安定な水田をもつ者は化学肥料の使用をさし控える可能性もある。

(4) 稲刈りの方法

現在では大部分の者が鎌を用いて稲刈りを行なうが、以前は穂づみナイフを用いて収穫する

14) daerah (sub-district) の長で、州政府から任命される。Galok は Daerah Chetok に属し、penggawa の事務所は集落の南に接する隣の集落 Chekok の入口にある。

15) この使用量は、農務局が推奨する 3 袋の約半分にあたる。

ことが多かった。現在でもクランタン州の他地方ではなお穂づみによる収穫が続いているところがある。鎌の導入に関しては、ケダー州への稲刈りのための出稼ぎの影響を考慮する必要がある。鎌を用いるようになって作業能率はある程度高まったと思われる。

padi semangat とよばれる収穫の儀礼が、鎌の導入と前後して姿を消していることに触れておきたい。以前は、女が稲の穂を7本切りとって、それを穀倉 (baloh) の中に大切に収めたものであるが、今日ではこれを行なうものはほとんど存在しなくなっている。

(5) 灌漑に対する考え方

水田から 1/4〜1 マイル離れているクランタン川から水をひくには、水位が余りにも低いためにかなりの資本と近代的技術を要する。仮に水がひけたとしても、土地の起伏の存在は、水の分配をかなりむずかしいものにする。このような条件の下では、かんがい施設をつくったとしても、とうてい経済的にひきあわない。従って、近い将来この地域に水田灌漑の設備ができることはまず考えられない。

上述の条件を認めつつも、村人達が灌漑というものをどのように考えているかをたずねてみた。灌漑が望ましいと考えている者49、よくないとする者13、態度不明8である。かんがいを望んでいる者の多くは、水を得れば、収穫の不安定さが解消されることを考えている。他方、かんがいを欲しない者の多く(8名)は、水田耕作の零細性を強く意識し、水路をつくることによって土地が失われることに抵抗を示す。また若干の者(4名)は、既に深水地域にある自分の水田が、さらに水をひくことによって水没してしまうことをおそれている。以上のように、起伏の存在する土地を条件として、一方では水に対する強い欲求が存在し、他方では水没を心配している現象がみられる。また自給を目的とする狭い耕地面積を背景として、土地を失うことに対する強い不安が存在するのである。

ま と め

以上に叙述して来たように、Galok を含むこの地域における地形的な制約は、稲作における不安定でかつ低い収穫をもたらし、同時にゴム園との並存という状況を出現させた。かくして稲作は、商品作物としてではなく、自給用食糧の確保のためという性格を顕著に示す。このような稲作の性格と、核家族を主体とする家族形態は、零細的な稲作を、きわめて単純な方法で成立せしめている。そして、そこに投入される労働は、必ずしも労働能力の最大限とは言えない。このようなメカニズムをまとめると図3のごとくとなる。

最近導入されたタバコ栽培は、現金収入の機会を増大し、稲作に対しても、機械化や化学肥

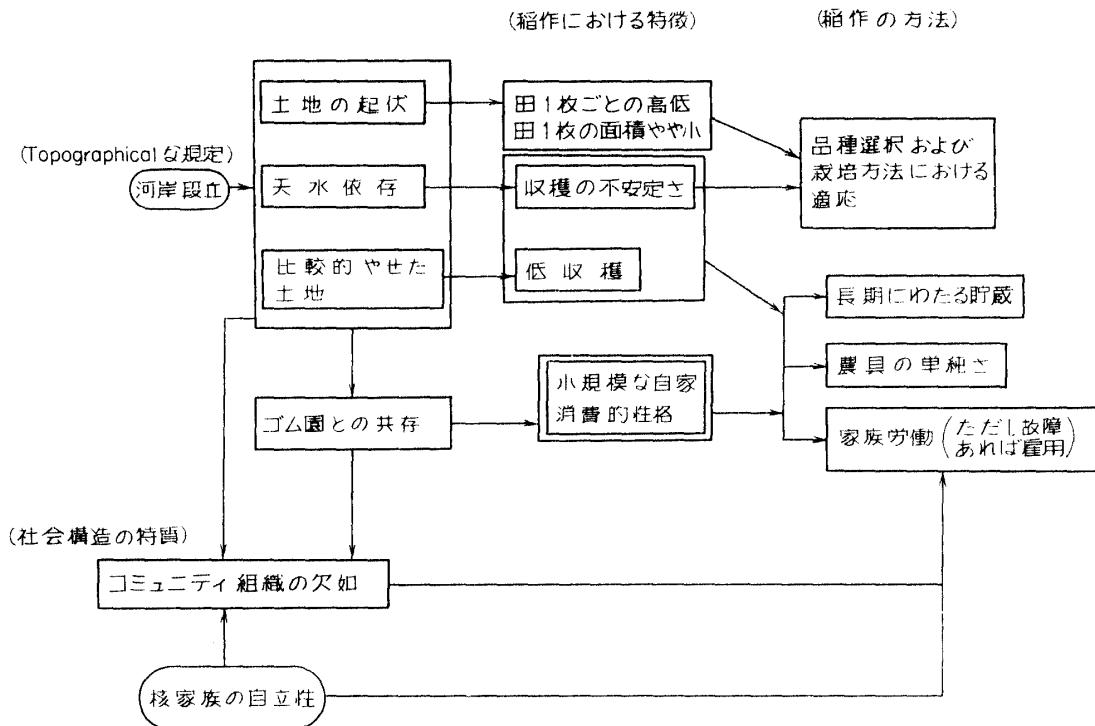


図 3 Galok における稲作の特徴

料の使用など変化の方向に進むことを容易にした。しかしながら、上述したこの地域での稲作の条件は、このような近代化を必ずしも全面的・急速には受け入れないのである。主な稲作地域からとり残された小さな稲作地域の問題の一端をこの村にみることができる。こうした不安定な稲作地の面積は比較的大きいのであって¹⁶⁾、将来の開発計画が、畑作物というチャンネルを通していかに進められていくかが今後の大きな問題となる。

16) クランタン州において稲作が行なわれているのは 188,000 エーカーであるとされるが、そのうち 79,500 エーカー (42.3%) が, Lemal, Pasir Mas, Alor Pasir, Kemubu, Salor などのかんがい計画に含まれているに過ぎない。